

# 大洋丸事件

二十一回生 平田 坦

太平洋戦争が始まった1941年12月8日から僅か5ヶ月しか経過していなかった1942年5月8日、東南アジア各地に赴任する経済人を乗せた客船大洋丸が長崎県五島列島沖でアメリカの潜水艦グレナディアカー号の魚雷攻撃を受け沈没、乗客乗員合わせて合計1360名のうち817名が犠牲者となったという大事件がありました。5月5日に宇品港を出帆してまだ3日目、日本本土の直ぐ近くでの出来事でした。

日本軍はハワイ真珠湾攻撃以降、僅か数ヶ月の間に東南アジアの主な国々を手中に収め、当時は日本国中が戦勝気分で盛り上がりつつありましたが、実際には既に日本周辺の制海権は危うい状況にあったという事です。軍部はこのニュースが広がることと国民の戦意喪失に繋がることを恐れ、当初は生存者を隔離するため長崎の旅館に留め置いたり、家族・関係者に口外を控える様指示したりもしていましたが、あ

第一次世界大戦の敗戦国だったドイツから戦勝国への賠償として差し出された客船「Cap Finisterre」がイギリス・アメリカを経由して日本に引き渡され「大洋丸」と名付けられました。総トン数14,458トン、全長180メートル、型幅19.87メートル、型深10.57メートル。当時「太平洋の女王」と呼ばれた浅間丸に匹敵する大型客船でした。

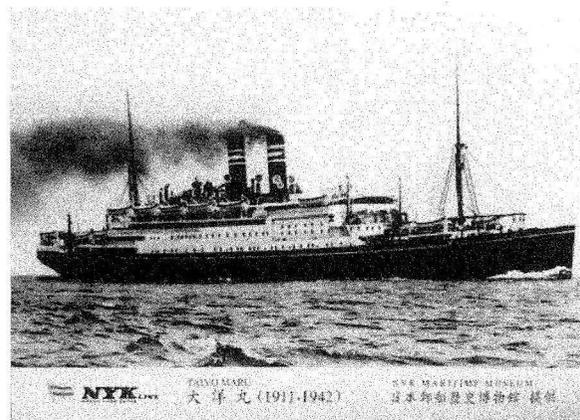
1921年に太平洋航路に就航、1932年にはロスアンゼルスオリンピック出場の日選手団が乗船しました。女子水泳の前畑秀子選手(200メートル平泳ぎで銀メダル。「前畑、ガンバレ!」で有名な実況放送は4年後のベルリンオリンピック。金メダル)もその中の一人でした。また千里山人の南部忠平選手も一員として乗船していた筈です(このオリンピックで三段跳びの世界記録をたて優勝)。当時多くの著名人が船客として太平洋を渡りましたが、1936年には同船上で昭和の風雲児辰巳栄一(日本陸軍軍人、後に吉田茂の腹心)と白洲次郎(吉田茂の側近)が偶々乗り合わせ、日本の将来を熱く語り合ったという逸話も残されています。

日本・アメリカの関係が悪化して太平洋航路は中

まりに多い犠牲者の数で事件を隠しきれず、結局遭難記事として後日新聞に掲載されました。しかし記事は勝ち戦の派手な報道の陰に隠れて、世間には大事件としては伝わりませんでした。その為、この事件はほとんど闇から闇に消え去ろうとしていました。

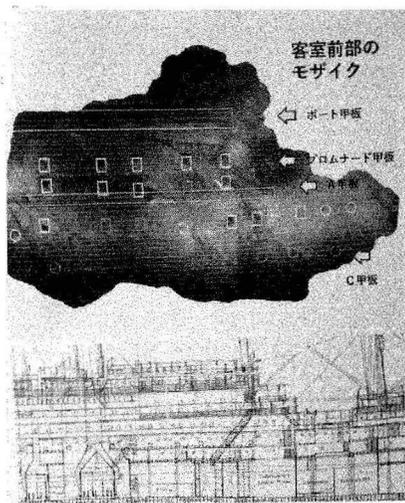
処で、先ず大洋丸とはどういう船だったかを簡単にご説明します。

航行する在りし日の大洋丸



止となり上海航路に就航、更に1941年には、ハワイからの日本人の引揚げに一役を担いましたが、同年、戦争勃発により陸軍の徴用船となりました。





沈没した大洋丸の客室部分の  
写真とその部分の見取り図

1942年5月5日、大洋丸は宇品港を出港して東南アジアに向いました。乗客は主にアジア各地の経済振興・インフラ整備のために選ばれた多数の商社マンや技術者（産業戦士と呼ばれた）でした。宇品出帆後3日目の5月8日夕刻、東シナ海の五島列島男女群島沖を航海中でした。フィリピンのコレヒドールがその2日前に陥落したのを祝って船内では祝宴を開いていたのですが、その最中、17時45分に米国潜水艦グラナディアー号の魚雷攻撃を受け積荷のカーバイドが爆発、大火災を起こし船首が大破して55分で沈没したと記録にあります。

年8月25日に屋久島の西方、北緯30度47分58秒、東経127度37分53秒の海底（水深130m）に沈んでいる船影が発見されました。船の前方は爆発で跡形も無い状態でしたが、残された船形は間違いなく大洋丸のものと確認されました。私は探索の一部始終をテレビ（ニコニコ生放送）の実況中継で観ておりました。この探索成功は直ちにNHKテレビのニュース、各全国紙に大きく報道されましたのご存知の方もあるかと思えます。

実は私の父、平田多鹿男は三菱商事に勤務しておりました。シンガポール支店駐在の辞令を受けこの大洋丸で赴任の途についていたのですが、任地に足をつける事なく殉死致しました。父は34歳、母は29歳、私は5歳、妹は2歳でした。宇品を出帆したばかり、まだ日本の海域を出てもいないにも拘らず、任地の土を踏むこと能わず遭難した事は誠に無念であつたらうと推測しています。父の遺体は見つかりませんでした。我々母子は健在であつた母の実家に身を寄せ、支援を受けながらその後の戦中・戦後の混乱の中を生き抜く事が出来ました。祖父の転勤で数回移転をした後、千里山の地に落ち着いたのは1948年（昭和23年）で、以降、母は勤め人をしな

それから75年の年月が経ちました。文藝春秋2017年8月号に浦環（うらたまき）東大名誉教授・九州工業大学教授が自ら開発された海中ロボットを使って五島列島沖に沈んでいる日本の潜水艦24隻（注記1参照）を探索され全て発見されたという記事に出会い、面識はなかったのですが、浦教授に同海域で沈んでいる大洋丸の船影につき何か情報をお持ちでないか、問い合わせを致しました。

注記1…終戦時に残っていた日本海軍潜水艦が連合軍の命令で、五島列島沖に沈められました。この潜水艦全ての探索に成功した記事はNHKテレビ、各全国紙にも報道されました。

浦教授は大洋丸事件の事はその時までご存知でなかったようですが、残っている資料を調べられた結果、隠されていた大事件であつた事を知る処となられ、同教授が主管されている（社）ラ・プロンジュ深海工学会で大洋丸探索プロジェクトを立ち上げて下さる事になりました。残されていた記録を参考にしながら海上からの探索を行った結果、2018

がら妹と私を育ててくれました。私達兄妹が転入した小学校が千里第二小学校、私は5年生、妹は2年生でした。

私は1960（昭和35年）年学業を終え、父の務めた三菱商事に採用して頂きました。在籍中にいくつかの海外勤務を経験しましたが、現役最後の勤務が私達家族の思いの籠ったシンガポール（1991年（平成3年）—1994年（平成6年））となり、商社マン冥利に尽きる思いでしたが、目には見えぬ奇しき力の働きを感じざるを得ませんでした。会社には感謝の気持ちで一杯です。

母には数回シンガポールを訪れてもらい親孝行が出来ました。

妹も娘と一緒に訪れてくれました。

上記の様な経緯を経て、現在は東京に住んでおり、東京の千里山会で多くの会員の方々の親交を持たせて頂いているのですが、その中で千二小学校の先輩である三分一克美さん（14回、昭和18年卒）のお父上と同じく大洋丸で遭難されていた事を知りました。お父上は日綿実業社員としてビルマへの赴任

途次だったそうです。享年45歳。お母上は12歳の克美氏、11歳の妹さん、5歳の弟さんを抱えておられ、やむなく千里山を離れご両親の故郷である山口に移転されて3人のお子さんを育て上げられました。現在は五島沖につながる瀬戸内海を見下ろす墓地に眠られているそうです。三分一さんとはとりわけ親しくお付き合いをさせて頂いております。

追記…母は晩年、自分が亡くなったら分骨して東シナ海に撒いて欲しいと言っておりました。(注記2)浦教授にその事をお話して大洋丸探索船が北九州市を出発する前に母の遺骨と家族の写真をお届けしました。三分一さんもご家族の写真をお教授に委託されました。大洋丸発見の当日、浦教授とボランティアの方々が探索船上で海面に向かって合掌後、花束と一緒に海に投げ入れて下さる様子を実況中継(ニコニコ生放送)で見入っておりました。75年を経て漸く父母が一緒になれた瞬間でした。三分一さんのお父上と私の父が届いた家族写真を見せ合いながら互いの家族の事を楽しく語り合っているのではないかと推察し

胸を熱く致しました。

注記2…母は2008年(平成20年)に亡くなりました。翌年の父の命日である5月8日に妹と五島列島の福江島に向き最北端の岬から東シナ海に散骨を致しました。ただ、東シナ海とは言え現場からは相当離れておりましたから父の処まで届かないのではないかと心残りもあり遺骨の一部を手元に残しておりました。この残っていた遺骨を浦教授に託す事ができたという次第です。

最後になりましたが、浦教授、ボランティアの方々、探索資金募集に応じて下さった多くの方々に心からなる感謝の気持ちをここに表させて頂きます。

#### 参考文献

日本郵船戦時船史 日本郵船 1971年  
大洋丸誌 大洋丸会 1984年  
業戦士、昭和17年の漂流 朝日新聞 1988年  
シンガポール日本人会百年史 シンガポール日本人会 2016年(P.211)他。